

薬史レター

(薬史学会通信改題)

日本薬史学会

J S H P



第44号

2007年1月

〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16 (財)学会誌刊行センター内日本薬史学会事務局
TEL (03)3817-5821 FAX (03)3817-5830 URL <http://yakushi.umin.jp/>

日本薬史学会2007年カレンダー

- 4月17日(土) 総会、学会賞授与式、(東京大学薬学部講堂) 13時30分
総会講演会 15時00分
学会賞受賞講演 「緒方洪庵の薬箱とその生薬」 阪大医学資料室 米田 該典
総会講演 「評価科学」提唱への道のりと近代化社会における役割について
薬剤師認定制度承認機構 内山 充
特別招待講演 「韓国薬学の歴史」(日本語で講演されます)
韓国、ソウル大学校、薬学大学教授 沈 昌求(Prof. Chang-Koo Shim, Ph.D.)
懇親会(東京大学山上会館) 18時00分
- 11月11日(日) 年会、長崎*
- * 西洋医学教育発祥150周年記念・長崎大学医学部創立150周年記念の行事 [11月9日(金)~10日(土)] に引き続いての開催です。
- 11月 9日(金) International Historical Conference
11月10日(土) International Historical Conferenceと記念式典
11月11日(日) 医薬洋学史合同大会
9:00~15:00 A会場: 医史学会
B会場: 薬史学会
15:00~18:00 医史学会、薬史学会、洋学史学会合同シンポジウム

事務局よりのお願い

- (1) 平成18年度の会費未納の方は至急納入下さるようお願い致します。平成19年度の会費は新会計年度になって御請求申し上げます。
- (2) 薬史レターへの投稿をお待ちしています。薬史学会通信No.41に掲載されている「薬史レター投稿のヒント」を参照下さい。

日本薬史学会年会 報告

臨時理事・評議員会(2006年11月11日)

年会の昼食休憩時間を利用し山川会長が議長となり開催された。主な報告事項は(1)本レター第1項記載の2007年度行事の計画進行状況、特に年会については出席された長崎大学大学院医歯薬総合研究科、薬学部の芳本忠教授より説明があった。(2)薬史学会賞は米田該典評議員に授与を決定、奨励賞は該当者なしと発表された。(3)奥田年会長より年会シンポジウム「日本の病院薬剤部・薬剤師の歴史」を企画した際におこなったアンケートは取り纏めてその結果の報告は薬史学雑誌に投稿する予定を示された。(4)山川会長は年会発表の演題は薬史学雑誌に投稿されるよう重ねて要望された。(5)2008年の年会開催地は大阪を提案した。

日本薬史学会2006年会 聴講記

山田 光男

日本薬史学会2006年会は奥田潤名誉教授を年会長として、11月11日(土)に名城大学八事キャンパスの薬学部6号館・4F・情報メディア室で行われた。以下に名城大学薬学部沿革および聴講の印象記を簡単に記す。

名城大学薬学部の沿革

今回の年会開催会場になった名城大学薬学部の概要を紹介する。

1954(昭和29)年4月 薬学部薬学科を開設。

1996(平成8)年4月 薬学部医療薬学科新設。

現在の学長は兼松顕薬学博士(九州大学名誉教授)で、同大学薬学部(八事キャンパス)以外の学部としては、法学部、経営学部、経済学部、理工学部、農学部が、天白キャンパス、可児キャンパスに所在している。八事キャンパス(天白区八事山)には薬学部、医療情報センター、生命薬学リサーチセンターがあり、在籍学生(1~4年生)は、薬学科467名、医療薬学科462名、6年制学生は261名である。

日本薬史学会2006年会講演会場

講演会場は八事キャンパスの薬学部6号館・4階・情報メディア室で開催された。

6号館1階にはウィンドケースに入った毒薬天秤、薬研、薬壺が飾られ、4階の講堂ロビー外壁には多くの世界の薬学の歴史に関する絵画、写真、古文書などが掲示されており、薬史学会の年会場にふさわしい雰囲気であった。これらの展示に関してはご多忙中の奥田潤先生から別記解説文の寄稿を頂いたことに感謝する次第である。



一般講演・概要

座長 西田 幹夫

1. 宝暦5、6年における輸入唐薬の流通—長崎から大阪、さらに江戸へ—
関西大学大学院 羽生 和子
鎖国時代・長崎で輸入された唐薬は、大阪/道修町を経て大消費地・江戸で幕府公認の株をもつ日本橋本町の薬種問屋に送られ、東海、関東、奥州の地方問屋に供給された。
 2. 向井元升と西洋医薬品について 九州大学大学院 ミヒエル・ヴォルフガング
明暦期の長崎の儒医・向井元升が幕命により蘭医学を学び、また長崎の薬店、薬園について蘭館医と合同調査を行い、その結果を記した「阿蘭陀外科医方」の調査結果が報告された。
 3. 丹波敬三と衛生・裁判化学 日本薬史学会 ○末広 雅也 川瀬 清
丹波敬三が明治20年、東京帝国大学医科大学薬学科に衛生化学及び裁判化学の開講に先立ち、森林太郎(鷗外)、片山国嘉らと同じ船でドイツへ渡航した時代背景について報告した。
 4. 東京薬学新誌に関する考察(II) —薬学雑誌ほか明治初期の資料から窺われる当時の薬学の状況—
日本薬史学会 吉澤 逸雄
明治期日本の近代薬学の出発点を「東京薬学新誌」と「薬学雑誌」を通じて検索し当時の若い薬学当事者たちが、その後の発展に大きな役割を果たしたことを認めた。
 5. 星一の受領したドイツからの褒賞の品々 星薬科大学薬理学教室 三澤 美和
星薬科大学創設者・星一は第一次大戦後の荒廃したドイツ化学界に1920年に200万マルクを寄贈して日独交流に貢献し、ドイツから多数の褒章品を受領した。星薬科大学記念室所蔵品について解説した。
- 座長 山田 光男
6. 戦後日本の薬学運動史(2) 日本薬史学会 川瀬 清
2006年度から薬学教育6年制が施行されたが、戦後のわが国・薬学界の技術革新の結果ともいえる。薬学と薬業の乖離についての研究集団の戦後の活動史を述べた。
 7. 日本薬剤師会が薬学教育改革に果たした役割と限界 日本薬史学会 山川 浩司
戦後、GHQの薬学教育改革勧告から始った薬学改革問題について日本薬剤師協会発足(1948)から2004年の「六者懇談会で合意」までの経過を、委員の視点で報告した。
 8. ドラッグストアの歴史に関する一考察 ○佐藤 知樹(日本医歯薬専門校)、串田 一樹(昭和薬大)
昭和初期の個人経営時代から、地域住民の健康・福祉に貢献してきたドラッグストアの例を挙げ、現在、経営改革によって企業として大きく発展した歴史について考察した。
 9. 韓国のくすり博物館・医学史博物館の紹介 新見公立短期大学 石田 純郎
韓国一泊二日医学史の旅で、ソウル大学医学史博物館、延世(ヨンセー)大学医学史博物館、韓独薬品くすり博物館、大邱薬令市展示館などを实地訪問した結果を報告。
- 座長 高橋 文
10. Hans Sloane と17・18世紀イングランドのアポセカリ
青山学院大学兼任講師・津田塾大学非常勤講師 柳澤 波香
当時のイギリスでは Apothecariesの職務内容がPhysiciansと重なる部分があり、両組織間の不和が続いた。薬学や植物学に興味を持ち、Apothecaryの学習を修めた内科医ハンス・スローン(1660~1753)は、その融和に努力した。
 11. フランス革命と薬の専売—薬の自由販売は否とされた— 日仏薬学会 竹中 祐典

ルイ16世が1777年に香辛料商と調剤師を分け、フランス革命で薬業の自由が認められ、ナポレオン第一執政は1803年、法令で薬剤師の権利と薬の専売権を認めた。

12. F.Magendieの処方集(Formulary)英国第1版(1829年)について 行岡保険衛生学園 辰野 美紀
F.Magendieが1821年にパリで出版した「多数の新薬の調整と使用の為の処方書」は1822年の第2版以降、毎年改訂版が出版された。英国では1827年に「フランス版6版よりの翻訳が試みられたが、出版は1829年であった。英国は、すでに先進的にキナ樹皮やジギタリス葉を利用していたので、逆に、アルカイド抽出や導入をためらわせたと考えられる。

シンポジウム「日本の病院薬剤部・薬剤師の歴史」・(1)

座長 伊藤 達雄

1. 労災病院と薬剤部の変遷 労働健康福祉機構 旭労災病院薬剤部 藤井 広久
1947年9月「労災保険法」の制定に基づいて労災病院が設置・運営が始り、2004年には勤労者医療の推進組織に衣替え。「全国労災病院薬剤部会」の活動経緯を報告。
2. 日本赤十字社と名古屋第二赤十字病院薬剤部の歴史
名古屋第二赤十字お病院薬部 ○徳井 健志、小林 一信
1877年の博愛社設立から日本赤十字社創設の経緯および名古屋第二赤十字病院の前身の1914年、愛知支部八事療養所(ベッド数29床)が創立されてからの薬剤部充実の変遷を報告
3. 名古屋大学医学部付属病院薬剤部の歴史
名古屋大学医学部付属病院薬剤部 ○小倉 庸蔵、鍋島 俊隆
1871年、名古屋藩評定所跡の病院設立と同時に薬剤部(薬局)が発足。公立医学所から現名古屋大学医学部までの薬剤部(薬局)、薬剤師の人数、業務の変遷について報告。



シンポジウム「日本の病院薬剤部・薬剤師の歴史」・(2)

座長 奥田 潤

1. 陸軍衛生制度史に見る薬剤官について 陸上自衛隊衛生学校長 堀口 紀博
陸軍衛生制度史によって明治4年創設の「軍医療」、「付属本病院・兵团病院」および「軍医療事務章程・薬局定則」に始る薬剤官の地位、職務についての変遷を検証した。
2. 名城大学薬学専攻科の創設と変遷 —薬学教育が変われば薬剤師機能が変わる—

名城大学薬学部 ○半谷 真七子、松葉 和久
昭和50年に臨床薬学の実務教育を目的として薬剤師の研修課程として創設され「専攻科」が「大学院研究科臨床薬学専攻臨床技能コース」に発展した経緯の詳細を報告。

3. 日本病院薬剤師会の歴史 日本病院薬剤師会顧問 加野 弘道
昭和30年に設立された「日病薬」は昭和46年に社団法人化して「日薬」から独立し、平成2年に「日本病院薬学会」を設立。医療における薬学的研究の役割を果たしている。以上の「病院薬剤部・薬剤師の歴史」の各報告終了後、6人の演者が演壇上に並び(写真)、活発な質疑応答とともに討論が行われた。

特別講演

座長 山川 浩司

徳川家康所持の香・薬を中心にして

徳川美術館 副館長 山本 泰一

75歳の長寿を全うした徳川家康は薬マニアで「和剤局方」を手許に置き処方した。没後その薬種は尾張、紀伊、水戸の三家に5:5:3の割合で分与され、尾張家は182種であった。家康は香にも造詣が深く、自筆の練香レシピも残されており、尾張家受領分の香木は伽羅、沈香、真南蛮など88貫余にのぼる。南蛮貿易に意を用いたのは香木入手の為だったという。

(1) 徳川家康の遺産目録

家康の膨大な遺産の分譲目録は「駿府御分物ご道具帳」として尾張家と水戸家に現存しており、中に薬種、薬、道具などの帳がある。

(2) 現存する家康遺産の薬関係資料

薬種および香料関係として徳川博物館、久能山東照宮、日光東照宮、犬山白帝文庫の夫々の所蔵の薬物、局方、香木などについて詳細を述べた。

ついで、その詳細について講演要旨集に掲載の(表1)水戸家本「駿府御分物御道具帳」記載の薬種および(表2)「駿府御分物御道具帳」記載の薬種関係資料を参照、説明した。

以上の実りある2006年会は、盛会裡に終了した。

名城大学薬学部薬史学関連資料の展示

奥田 潤

1) 薬学部6号館玄関ホールของウインド・ケースによる展示

薬学部6号館の玄関を入ると正面のエレベータ右手にワインカラーの枠を持つウインド・ケースがあり、その中に毒薬天秤、薬研、ドイツ製薬壺が並べられ、11、12月は2枚のカラーのアートプリント“薬剤師としてのキリスト”(一つはギュセスタッドの教会所蔵、一つはハイデルベルグ薬博物館所蔵)が掲げられている。17~19世紀のものが多く、キリストが昔の薬局で天秤をもち、調剤師のうしろに立ち、机の上には各種薬壺が並ぶが、ラベルにはキリストに関係のある正義、愛、平和、希望などの文字が、また机上の紙にはキリストの言葉が書かれている。多分、当時、キリスト教の布教のために庶民にとって親しみのある薬局を背景にキリストを画かせたのであろう。これらのキリスト

の画は、当時の薬剤師にとって、彼等の職業の味方になったと思われ、興味深い。

{Ref. 奥田 潤：薬史学雑誌 36 175～9(2001)}

クリスマスが近くなると、この「薬剤師としてのキリスト」の画に見入る薬学生や外来者も多く好評である。2～3ヶ月に一度づつアートプリントを入れ替え、薬学部の玄関に入った時、ここは薬学部だという印象をもっていただけるようなアトラクティブな展示を心がけている。

2) 薬学部情報メディア教室横ロビーのアートプリントの展示

今回の薬史学会の会場であった情報メディア教室(300人収容)のすぐ横のロビーにはソファを置いて、多数の出席者が休憩できるようになっている。その壁にはカーテンレールがつけてあり、カラーのアートプリント(60cm×40cm)が原画のコピーと説明文を入れて約65枚展示してある。薬学生や学会、シンポジウム開催のときの来訪者に「世界の薬学・医学の歴史」を概観して頂くことを目的とした展示である。その内訳はパーク・デービス社が作成した薬学の歴史についての40枚、医学の歴史についての45枚併わせて85枚より45枚を選んで、説明文をつけて年代順に並べてある。すべて20年前に奥田が偶然にパーク・デービス社より恵与された原画からアートプリントを数年かけて作成して、5年前の退職時に薬学部に寄贈したものである。

薬学の歴史に関する主なものは、バビロニアの薬学、中国の神農、エジプトのパピルス・エーベルス、植物のテオフラトス、刻印粘土錠、ディオスコリデス、ガレヌス、ダミアンとコスマス、アラブの最初の薬局、1240年のフレデリック二世による医薬分業の式典図、モルヒネの発見者ザーチュルナー、キニーネの発見者カバントゥとペレチェ、アンプルの発見者リムザンなどがある。

「医学の歴史」に関するものとして、ハムラビ法典、ペルーのトレフニング治療法(頭蓋骨穿孔術)、アスクレピオス、パラケルスス、解剖のヴェサリウス、外科医ペレ、血液循環の発見者ハーヴィ、壊血病(ビタミンC欠乏症)のリンド、体内燃焼のラヴォアジエ、エーテル麻酔のモートン、パストゥール、レントゲン、エールリッヒと秦佐八郎、インスリンのバンディングとベスト、ペニシリンのフレミングなどの画が並んでいる。いずれも世界の薬学史、医学史を学ぶ上で必須のものばかりである。

また世界各国の薬学の父として、日本の長井長義、アメリカのプロクターのほか、病院薬剤師の協力者である看護師の代表としてイギリスのナイチンゲール、フランスの薬学部卒業生の誓いの言葉、世界各国の薬局のシンボルマークなども展示してある。

日本の薬学の歴史として、正倉院の薬物、薬師如来像と薬壺、華岡青州と通仙散などのアートプリントを掲げ、フランス中毒研究所より恵与されたカラーの有毒観賞用植物、毒草のシリーズ6枚なども展示してある。

奥田の退職後は今回の年会事務局長を務めた飯田耕太郎助教授(薬学教育)と新しいパネルの作成に励むと共に、パネルの共同管理を行っている。

内藤記念くすり博物館 見学記

塩原 仁子

2006年11月12日(日)薬史学会2日目

奥田潤先生 西田幹夫先生 篠田愛信先生が日本薬史学会と書かれたプレートを持ち、尾張一宮駅正面出口で朝早くから待っていてくださいました。

9時40分エーザイ(株)様より差し回しのバスにて、一路、内藤記念くすり博物館に向かう。快晴。途中、木々が紅葉をはじめ、柿の実は朱に染まり 秋の美しい光景である。車中、篠田愛信館長の説明を頂き、途中左手に一宮タワー(138mいちのみや)、木曾川・長良川・揖斐川を見、約30分で到着する。くすり博物館の歴史概略は、1971年薬に関する総合博物館として、日本で最初に設立した施設。趣旨は、創業者内藤豊次氏が「薬学・薬業の発展を伝える貴重な史資料が失われ、後世に悔いを残すおそれがある」と考えられ資料を収集したことに基づくものとのことである。1986年には展示館完成、合掌造りを模した本館、向かって右に展示館、左に2階建ての図書館がある。博物館の特徴は、薬用植物園を併設している。長年にわたり資料と図書を並行して収集してきたとのこと。清水藤太郎先生の平安堂文庫を中心に約8,000点の蔵書、1992年には、漢方医・中野康章先生(1874-1947)の大同薬室文庫の提供により、現在では、約62,000点に及び、内、半数は江戸・明治時代の貴重な和装本。

薬用植物園 The Medicinal Plant Garden

10,000m²の広さで約600種類の薬草が栽培され、温室、標本園もある。キハダ、呉茱萸、当帰、茴香、鬱金、センナなどの薬用植物の他香辛料、染料植物もあるとのこと。植物画講座・薬草栽培教室を開催しているとのこと。

★主要展示資料

薬業の発展 Development of Pharmacy

博物館展示館入口頭上には、掛看板が飾られ、薬業の発展が物語られている。江戸中期、薬業の発展と共に、中国からの医薬書の導入もあり、優れた売薬が各地で作られ、特に京・大阪・江戸の各都市、街道筋、門前町に薬屋が店舗を構えるようになった。これらの薬舗は目を見張るような立派な看板を掲げ広告宣伝に大いに力を入れて一般の関心をかっしたとのこと。菊花の紋章をつける看板も薬屋には多かったとのこと。紙看板・旗看板・暖簾

くすりを探し求めて In Search for Drugs

館内入口 左には、**薬狩りの図**(Collecting Medical Herbs) が飾られている。推古天皇19(611)年大和宇陀に百官を率いて薬狩りに出かけたことが『日本書紀』に記されている、我が国最初の薬草採集の記録である。このことから、薬狩りに出かけた5月5日を薬日とし、軒先に菖蒲や蓬を下げたり、菖蒲湯に入り、一年の健康を祈願するようになったとのことである。これは中国の風習に基づき、同日に種々の薬草を採取して蓄え、病気に備えるものであったが、次第に行楽化し、摘み草から、やがて男女の野山遊びへと変化していった。

病と祈り：郷土玩具・おまもり・絵馬

各地に残っている品が飾られているが、神社や寺から魔除け、厄除け、安産祈願として、子供の健やかな成長を祈って作られたものが少なくない。奉公さん(香川)、獅子頭(富山・石川)、疱瘡除け玩具、赤べこ(福島)、高崎だるまは、疱瘡神は赤色を嫌うと信じられていた為、疱瘡玩具は赤く塗られていた。子供の成長したことへの喜び、無事育つことへの祈りは、犬張り子、姫だるま、西尾の狗、子供の病除けは、土鳩(京都府)、鳩笛(東京都)他など、玩具を神仏に奉納して、加護を求めたりした。

正倉院種々の**薬帳**は、天宝勝宝8(756)年、光明皇太后が東大寺に献納した薬物の目録。麝香、犀角など60種の薬物が列記してあり、仏前に献じ、病人に頒ちあたえ病苦を救うとある。正倉院薬壺・須恵器の薬壺も飾られている。

本草学の**標本**も目を見張るばかりである。

神農本草経：神農に名を託した書。個々の生薬について解説したもので、後漢代(1-2世紀)に成った

と推定される中国最古の薬物学書である。365種の漢方薬(動・植・鉱物薬)が収載されている。上品・中品・下品の3ランクに分類されている。

江戸時代以降の日本において、神農は医薬祖神として神農を奉る風習は、中国から日本に伝わった。神農崇拜の風習が定着すると共に、日本では多くの像や賛画がつけられた。これらの神農画や神農像から、信仰の厚さをうかがい知ることができる。

本草学とは、身近な植物・鉱物・動物などを、薬として利用することを考えた学問である。自然物の形態、生態、製剤法、処方、薬効、薬理などを研究する学問であるから、さしずめ薬物学といえよう。日本では、6~8世紀に中国から伝わった本草書「本草経集注」「新修本草」により、本草学の基礎が確立した。江戸時代には「本草綱目」が伝来し、日本の本草学者によってわが国独自の本草書が多く著されることとなった。江戸時代中期以降になると、西欧からの蘭方医学が導入されて、中国とは異なった本草学の流れが誕生した。医療を主とした本草学は、しだいに近代的な博物学や植物学的な観点に基づいたものへと移り変わっていった。

往診用籠(江戸後期)、往診用薬箱(江戸後期)は備中走出の山本家に伝わるもの。ぶどうの木目を生かした美しい薬箱である。

往診用百味筆筒、医師調剤の図、薬匙・圧尺/19-22cm 医師は往診後その場で調剤する。薬包紙を並べ、押さえに圧尺を置き、薬を匙で量り配る。携帯用薬箱は、幕末の頃、徳川家から芥川家へ下賜されたもので、当時としては珍しく西洋薬が組み入れられている。百味筆筒の上に飾られた、美しい黄色の花が印象的であった。

配置売薬(Consignment of Drugs by Peddiers)のおこり

前田正甫公「反魂丹」製造所視察の様子が模型でできている。この頃は、雪深い山村、人里離れた地方はもとより、町中でも、医療に恵まれなかった人々にとり、配置売薬は心の拠り所であった。年に1度、薬屋さんが各家庭を訪ね、薬を置き、翌年使っただけの代金を受け取るという、配置売薬の独特の商法である。江戸中期から急速に全国に普及し、人々に親しまれた。各家庭の居間の柱には、風邪薬・胃腸薬・痛み止めなどの売薬を入れた大きな袋が下がっていた、やがてそれは、厚紙の箱になり、桐の箱になるなど、時代とともに変わっていった。配置売薬はその薬名や薬袋のデザインが独特。売薬印紙は、明治15年から大正15年まで、売薬には1割の税がかけられていた。

鍼のひびき、灸のぬくもり。

東洋には、病を癒してきた3千年の歴史がある。室町時代までは、鍼灸といっても灸が主体であった。日本の鍼治療が急速に発展するのは戦国時代から江戸時代にかけてである。当時の鍼は、切る鍼と焼く鍼とのこと。江戸時代中期までは、学習は主に銅人形(模型)と明堂図(図面)を使って行われていたとのこと。灸は艾を肌の経穴の上に乗せて火をつけて経穴を刺激し「気」を整える治療方法。

灸艾図：弟子を連れた医師が患者の背中に灸をすえている

医師は灸を塗る膏薬の準備をしている。宋代の図

街をゆく行商

「定齋」売り 江戸時代から昭和30年代に至るまで、夏の風物詩として庶民に親しまれてきた暑気あたりの薬・定齋。天秤棒を肩に、腰でゆっくり調子をとって歩くたびに、引き出しについている把手が、ガチャガチャと成り、定齋売りの来たことがわかった。

くすりをつくる Manufacture of Drugs

江戸時代の人車製薬機が複製され興味深いものである。石臼・こね鉢・薬研・片手切・乳鉢・乳棒・箱ふるい・計数匙

蘭学のおこり Introduction of a Western Medicine

1. 解体新書：4巻附図1巻 安永3(1774)年わが国最初の西洋医学書の訳本。オランダの解剖書ターヘル・アナトミアを杉田玄白、前野良沢らが4年間かけて訳した。
2. 世界初の全身麻酔
華岡青洲(1760～1835)紀伊国那賀郡名手庄に生まれ、吉益南涯に古医方を、大和見立にオランダ流外科を学んだ。
 - 1) 華岡流手術図
 - 2) 乳癌手術の図：曼陀羅華を主剤とした麻酔剤「麻沸湯」を創案。文化元年(1804)に全身麻酔下で乳癌摘出手術に世界で初めて成功した。
 - 3) 晩年の華岡青洲像
 - 4) 手術道具の展示
3. 海を渡って
シーボルトの薬箱：江戸後期
洋方医の薬箱
らんびき：南蛮医学とともに伝来した蒸留器
フラスコボトル：オランダから
オランダ徳利：酒や薬品を貯蔵・運搬する為オランダから渡来

海外の資料

世界各国の乳棒乳鉢

スペインは17.5cm、ブラジルは28cm、日本は10cm、薬瓶、調剤用具、らんびきなどが、展示されている。

近代医学への貢献

医者・学者の果たした役割

江戸時代になると、必要な時には往診をしてもらえたとのこと、田舎ではお医者さんの家に駕籠が置いて有り駕籠に乗せて担いで患者の家まで連れてきたとのこと。往診用駕籠の中には、書見台があり、本を読めるようになっている。患者さんの家に着くまでに医薬書などで下調べをしたのでしょうか。19世紀には、生薬から有効な成分だけが取り出され、薬品として使われるようになった。20世紀に入ると、エールリヒと秦が発見した最初の化学療法剤サルバルサン、ドーマクがプロントジルを開発し、化学療法の時代が来た。フレミングにより発見された青カビから作られたペニシリンの効果は、発見14年後に医薬品として治療に用いられるようになった。ケースにはアンプルが展示されている。

健康への戒め

江戸中期から後期にかけて、家庭医学書をはじめ、はしか・疱疹・コレラなど疫病の養生法・治療法を解説した錦絵が数多く出されている。一見、ユーモラスに見える疾病退治の絵の中にも、真剣な願いが色濃く反映している。日本は中国から医薬文化を享受すると同時に皮肉にも病原体も享受せざるをえなかったのである。

日本でコレラが最初に大流行したのは、文政5(1822)年のことである。九州あたりから関西、東海道へと進んだが、箱根を越えなかった。それから36年後、幕末動乱の安政5(1858)年から約3年間、安政コレラが猛威を奮い、江戸から遠く函館にまで及んだ。錦絵は教育用リーフレットとして役立った。

★ 図書館2階正面には、清水藤太郎博士・中野康章博士の在りし日の写真が飾られている。

Collections of books

大同薬室文庫

中野康章(1874~1947)は、明治7年4月18日秋田県の神職の家に生まれた。父周造は「殺生を禁じ、無駄を省く」を家訓とし、狩野派の絵画に秀でていた。その父の薫陶を受けた。17歳で上京し、漢方医学を修め、浅田宗伯に学び、最後の弟子といわれている。宗伯亡き後は養嗣子・浅田恭悦と共に漢方医学の研鑽を積んだ。73歳で亡くなるまで、近畿地方において浅田宗伯の教えに基づく皇漢医学の伝承と普及に貢献した。康章は神職や医業の傍ら、多くの書籍を収集し、居室を自ら「大同薬室」と称した。

25,000冊の蔵書は医学、薬学関係だけではなく、多岐の分野にわたっている。また、書籍以外の医薬に関するもの、書画・書簡・広告・地図・絵図・絵巻物その他の資料を長年にわたって集めて、大切に保存してきた。剣道を習い、書画を趣味とし、書を横井北泉に、画を橋本雅邦に学ぶなど多方面に造詣が深かった。一方、国学者の黒川真頼に師事し、漢学を田中従吾軒に指導を受けた。また、和歌なども好み江戸時代の和歌の短冊を網羅して集め、生前より短冊の収集家としても知られていた。井原西鶴、上田秋成の短冊も展示されていた。多趣味で知られた康章であったが、コレクションを見ると、美術品というよりむしろ医薬と歴史上の偉人に関わるものを中心であることがわかる。医薬関係の人物資料は700点ほどで、その中でも、師である浅田宗伯関連の資料は200点ほどを占める。宗伯は頼山陽にも師事して広く学問を身につけ、学殖の広大・多彩さはその文章・詩・書のいずれも秀れ、医師であり、史学者であり、文人であり、書家であり、思想家であったといわれる。「大同薬室文庫」という名称は、居室名が「大同薬室」といい、蔵書印に「大同薬室」とついたものが多いことに由来しているとのことである。医薬分野以外の書物も多いのが特徴であるとのことである。

平安堂文庫

清水藤太郎博士から寄贈された文庫で、約6,000冊の蔵書。内容は、医学史・薬学史・漢方書・本草書・各国の薬局方・調剤学・薬用植物書。

三皇としての神農

中国の歴史を語るとき、多くの典籍では三皇五帝をとりあげて、中国文化の基礎は、この三人によって作りだされたことを紹介している。紀元前221年、始皇帝によって秦の大帝国が出現する。先秦の時代、儒者の認識にしたがえば、道徳政治が実践された理想の社会と見なされ、統治者は民の師表に仰がれる聖人であった。そこで、この時代は「三皇五帝の時代」と呼ばれた。

神農は、伏羲・黄帝とともに、聖天子の一人とされている。しかし、この三皇の概念は、後世になってからのものであり、三皇としてとりあげられる三人の人物構成は、典籍著者の政治的、あるいは思想的立場によって異なっている。伏羲は「易経」のもとを述べ、黄帝は「黄帝内経」に仮託された。神農の「神農本草経」の三つを合わせて「三墳の書」と称されている。

書物にみる神農伝説

中国の長い歴史の中で、医療に関する膨大な知識と経験が集成されて、多くの医薬書が著された。書物の冒頭では、医薬における文化英雄として神農の功績を称えるものが多く、これらを通して神農伝説は日本に伝わることとなった。

「本草綱目」

中国国内はもとより、日本の本草学に大きな影響を与えた書物。「神農本草経」以降、薬効の視点から上・中・下の三品に分ける分類をしてきたが、「本草綱目」では、自然物の種類によって分類した。日本では慶長9年(1604)以前に林羅山(1583~1657)が本書を実見した記録が最も古い。中国で初版が

出版されてから、8年後の出来事である。さらに33年後の寛永14年(1637)に、日本でも最初の刊本が出版された。

「大和本草」

当時、本草学の教科書的存在だった「本草綱目」と比較しながら、1,362種類の動物・植物・鉱物を取りあげ、その日本名と中国名・地方名・来歴・形状・効用などを詳述し、300点余りの図を見ることができる。日本の本草学が独自の一步を踏み出す画期的な書物といえる。著者の貝原益軒(1630～1714)は儒学者で、80年をこえる人生の中で「花譜」「菜譜」「養生十訓」「養生訓」など多くの書物を著した。

図書館

入口、直ぐ左手には、エーザイ(株)内藤晴夫社長直筆の銘板「深き思い知を生む」と書かれている。2階建ての白い建物で、1階は、洋装本の書架、2階には、和装本書庫(24時間温湿度が調整)資料収蔵庫、閲覧室、調査研究室、修復作業室。約62,000点の図書収蔵とのこと。史資料の一部、巻物・掛軸・短冊・錦絵など13,000点収納とのこと。充実した図書館に、目を見張るばかりである。百聞は一見にしかず。

当日、大同薬室文庫について、野尻佳与子氏・伊藤恭子氏より、セミナー室にて説明がありました。昼食は、博物館よりバスで5分に位置する敷地内、厚生センター食堂で薬膳弁当に舌鼓を。調理士より説明をうける。大きなお弁当箱に入っている、一品一品の料理の薬効の説明をしてくださり、領いた。ごはんは、松の実入りで、疲労回復、胃腸保護作用、南瓜の種のスープは、解毒、利尿作用、お茶は、鬱金茶、健胃、胆汁分泌を促進させ肝機能を高める作用が、箱の中の多くの種類のおかず、茯苓入り鮎の煮付け、美味である。茯苓は神経を安定させ、消化機能を順調にする。胡瓜の紅花漬けは、婦人病、冷え症、更年期障害に効果有り、烏賊の枸杞子炒め、枸杞子は滋養強壮作用、体質強化、その他、多くの種類のおかず、素敵なお料理は、目を見張るばかりで美味である。食後、バスで園内をまわり、館長の説明に耳を傾け、広い池に泳ぐ鯉の姿を目の当たりにした。広い庭園の紅葉がひとときわ美しかった。

再び、図書館に戻り、思い思いに古文献・図書検索をした。先人の学問の奥の深さを感じる時間であった。



学芸員の方々にご協力、ご教示頂きました。謝意を申し上げます。14時 皆様が玄関までお見送りくださる中、くすり博物館を後にし、一路、国宝犬山城に向かった。館長、職員全員の温かいお言葉で充実した見学であり、感謝の念でいっぱいです。

14時25分 国宝犬山城、下山順一郎先生銅像前到着。篠田館長に御挨拶をし、バスに別れを告げました。

☆見学記作成に際しまして、下記他文献を参考にさせて頂きました。

- 1.大同薬室文庫資料目録
- 2.近世漢方医学史
- 3.薬の神さま 神農さんの贈り物
- 4.内藤くすり博物館パンフレット
- 5.くすり博物館だより
- 6.くすりの博物誌
- 7.漢方の歴史
- 8.その他

医薬史蹟の旅のついで・ヨーロッパの美術館めぐり (1)

山川 浩司

薬史学会では今までにヨーロッパ、北欧および中国の医薬史蹟の旅に出ました。これらの旅では医薬史蹟のついでに、数名の仲間や時には一人で各地の美術館などを見て回りました。これらの美術館などを観賞した折の印象を綴ることにします。勿論、薬史学会の旅行プログラムの他の機会に、小生が個人的に訪れた美術館を含んでいることをお断りしておきます。

パリの美術館などの印象

フランスのパリ市には医薬史蹟の旅以外にも数回訪れていますから、これらを含めて訪れた美術館での印象を記すことにします。パリでは誰も第一にあげるのは巨大なルーブル美術館です。上野の国立西洋美術館の2

0倍以上です。一日で見ることは不可能ですから、初めて訪れたのは1989年7月のスイスの旅を終え、パリ空港から帰国する時で時間も余りありませんでしたので目玉になるものに絞りました。この時にはすでにガラスのピラミッドの入り口から入場し、丁度パリ・サミット会議が開催中でしたから持ち物検査が厳しくなっていました。時間が少

ないので真っ先に階段の上に聳える翼をひろげる「サモトラケのニケ像」を見に行きました。優しいのか力強いのか強い印象を受ける像です。次は広場に置かれた想像を超えた大きなミロのビーナス像、女性美と力強さかをかね備えた像で圧倒されます。最後はルーブルの秘宝のダビンチのモナリザの絵画で



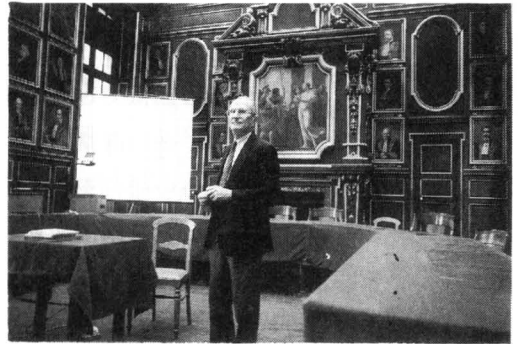
ルーブル美術館

す。急ぎ旅の日本の観光客のためにモナリザ像はこちらとの日本語の標識が示されています。この像はルーブル美術館を訪れるごとに設置場所が変わっていました。想像以上に小さな絵画で絵の具のひび割れが目立ちまゆげの無いモナリザ像で背景も異様な風景です。これらを見て回りながらルーブル美術館には大きな絵画が壁いっぱいにならに数段に飾られているのに驚きました。

これは美術館に限らず1995年5月の医薬史蹟の旅でパリ大学薬学部でフランス薬史学会長のフラオー教授に案内された時、パリ大学薬学部会議室の壁いっぱいに肖像画が飾られているのにも驚きました。1995年9月のパリでの第32回国際医薬史会議の後に、オランダのライデン大学で医史学のポイケルス教授に案内されてライデン大学講堂を見た時、壁一面に歴代の学長らの肖像画が飾られていて、空いている場がありません。ポイケルスさんにあなたの肖像画を飾る所は？ふと見上げると天井は白い壁になっていました。私はあそこに飾る所があると指差し大笑いになりました。

ルーブル美術館はその後に数回時間をかけて訪ねる機会に恵まれました。入り口が要塞であった城の地下から入るようになっていました。ナポレオンがエジプトから略奪した戦利品である巨大な古代エジプトの像群や彫刻の立像、彫刻絵画など大半は巨大のものが多いのにも驚かされます。パリでの国際薬史学会議の時(1995.8.25~9.1)に、ルーブルでダビッドの巨大な「ナポレオンI世の戴冠」の絵を見た時、その前の椅子にテニスの松岡修造選手がしばらくかけたままにのこりにあいました。丁度パリで全仏テニス選手権大会が行われていた時でした。この「戴冠式」の巨大の絵画は瓜二つをパリ郊外のベルサイユ宮殿を一人で訪ねた時にも見ました。構図と大きさもほぼ同じの大きな絵画ですが背景の人物が少し異なるようです。広大なベルサイユの庭内を見て回り帰路に着いた時でした。帰りの車内で切符を紛失してしまいました。パリ市内の乗換駅を出るのに切符を無くして困っていたので、駅員を探すために駅構内を捜し歩きました。地下のホームに回るとそこは小便臭い所でどこにも駅にこのような所があるものと閉口しました。ようやく出口の外に切符売り場を見つけましたので、大声で切符を紛失して改札を出られないことを伝えましたら、窓口の女性はそこの改札の鉄の枠を潜り抜けて来てと、言われ外に出て清算しました。なーんだ抜け出てもよいのかと思いました。

パリ市の美術館で思い出すのはセーヌ川のルーブルの対岸にあるオルセー美術館です。1900年のパリ万博の時のオルセー駅を美術館に改装した近代美術館です。ここは初めて訪れた1989年7月の時は改装中、二度目に訪れた英国、フランス医薬史蹟の旅(1992年5月)の時は休館日とついていません。パリでの第32回国際薬



パリ大学薬学部会議室
フラオー教授(当時フランス薬史学会会長)



オルセー美術館

史学会の時(1995年9月)、会場はサンジェルマン・デ・プレ界限に近い修道院美術を残しているヴァル・ドゥ・グラス修道院で行われました。修道院の中は多くの柱に中世の修道院の面影を残し、講演会場も修道院だなあと思わせる雰囲気でした。また国際会議の発会式はパリ大学のソルボンヌ大講堂で行われました。大講堂の大きな壁画と講堂内の周辺の柱にはラボアジェなどの塑像に圧倒されました。この国際薬史学会議には「フグ毒の研究史」を講演発表された末廣さんと訪ねました。この会議では小生は「戦後の日本の薬学教育史」を講演発表しました。オルセー美術館では昼食は最上階の食堂でモンマルトルの丘を展望し、天井絵を眺めながらレストランで至福の時を過ごしました。一日近くをオルセー美術館で過ごして近代絵画と彫刻像の鑑賞を堪能しました。

また、このパリでの国際薬史学会議の時、一人でロダン美術館を訪ねました。ここでも入り口の荷物検査は厳重でした。かなり広い美術館の庭園内に彫刻像が置かれており、館内にも多くの青銅の彫刻像が展示されていました。その中に少しあられもない姿の裸婦像があり、写真を撮ろうとしたのですが美しい二人の女性学芸員が、その像の近くで話し合っていましたので、気おくれがして写真に収め損じました。



ロダン美術館

また、パリ市の中心街近くのポンピドー美術館を訪ねました。建物の外壁に設置されているエスカレータに乗って館内に入りました。現代美術館はどこも同じようで大きな作品が広い館内に展示されていて、作品群が置かれている閑散としている館内を巡り歩きました。館外に出るとそこでは大道芸を披露している若者、屋外の池の周囲にある現代美術作品の場所には多数の人々で賑わっていました。

この外、パリの旧市内には街路や橋などに多くの美術的な要素を持つ建造物が多く、郊外のパリ・サミットの会場になった新凱旋門近くに行った時は、巨大な新建造物群に新しい建築美を見ることが出来ました。ここに来ると東京のビル群が思い出されます。やはりパリの町は新旧の美の要素に充たされている町です。

ドイツ・ミュンヘンの美術館とロマンチック街道の印象

ハイデルベルクの国際薬史学会議(1993年5月)への参加の機会に、ドイツ医薬史蹟の旅に参加しました。国際会議の開かれたハイデルベルクの市公会堂は入り口がアールヌーボーの飾りでネッカー川に近い街中にありました。近くのハイデルベルク大学の古い校舎やブンゼンの像がキルヒホッフと共に分光学研究を行った研究棟の前にあり大学の雰囲気の濃い街でした。ハイデルベルクの丘の上に築かれた古城の中にドイツ薬博物館があり、ドイツ国内にあった中世の修道院薬局や錬金術工房などが移設されていました。またこのハイデルベルク城にはワイン醸造所跡があり巨大なワイン樽が眼を引き、城から眺めるネッカー川とハイデルベルク周辺の眺めは美しいものでした。町に下ってネッカー川にかかるアルテ橋付近からのハイデルブルク城周辺ほはすばらしい絵になる眺めでした。

ヴェルツブルクの街では華麗なレジデンスの建築を見学し、シーボルト像やレンドゲン記念研究所などを見ました。ここを出発点として日本人に馴染み深いロマンチック街道をバスで南下しました。この

街道には戦争で壊滅し復興した中世の雰囲気をたたえている街の博物館ともいえるローテンブルクの町で一泊。この街道の途中に中世の雰囲気を濃厚に残すディンケンスピュル、ネルトリンゲンの町に寄り少時間見物しました。この街道はそれ自身が街の美術館の雰囲気を持っていました。街道にある教会ではリーメンシュナイダーの彫刻像など中世美術に圧倒されました。ロマンチック街道をたどりドナウヴェルトから街道から分かれてインゴールシュタットの街に入りドイツ医学史博物館を見学してからミュンヘンに到着し、完備した施設を誇るドイツ科学博物館を見学してミュンヘンのホテルに入りました。ここでは各自一日を自由行動に当て、私は有志四人で一日、アメリカ人旅行団の観光バスに潜り込み、ロマンチック街道の終点地のフュッセンへの観光に向かいました。リンダーホーフ城とノイシュバンシュタイン城には過剰な装飾美に気が詰まる思いでした。異常な神経も持ち主でなければあのような所には住めないと思いました。この城を造ったルートヴィヒ二世が入水自殺したのも分かるような気がします。

ミュンヘンの町では空港からの出発までの午前の半日の自由時間があり、私が美術館見学に行くと言いましたら忽ち賛同者があり四人でタクシーに乗り込み、ドイツの15~18世紀のドイツ絵画を集めたバイエルン州立美術館のアルテピナコテーク美術館を見学しました。戦争で破壊されましたが修復された豪壮な建物です。周辺は緑の広場で気持ちいい所でした。ここを出ると19世紀以降の現代美術を集めたノイエピナコテーク美術館が隣接しています。ここは東京都現代美術館やポンピドー美術館と同じ印象でした。

ベルギーとオランダの美術館の印象

先に述べたパリの国際薬史学会の最終日に医薬史蹟の旅に参加された皆さんとホテルで落ち合いました。一同は翌日のバスでフランスをぬけてベルギーに入りました。見渡す限りの平原の国土で、注意していたのですが、どこで国境を越えたか分かりませんでした。ブリュッセル市に着くと万国博覧会の会場になったアトムウムを見学しました。球体の展示館をエスカレーターで構成した分子構造のような近代建築で、DNAなどの近代生物科学のグラフィックデザインの展示館でした。

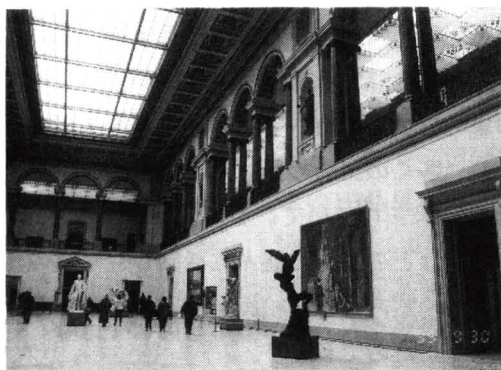
このブリュッセル市では中世から近代および現代美術の充実したベルギー王立美術館を皆で見学しま



ノイシュバンシュタイン城



バイエルン州立美術館



ベルギー王立美術館

した。ここの古典美術館はメモリンク、ブリーゲル、ルーベンス、デルポーなど、中でもルーベンスの大作の絵画は圧巻で、ルーベンスとその工房の人たちの腕の確かさを表している強い印象を受けました。地下は明るいガラス張りの近代美術館に結ばれていました。ルーベンスから開放されましたが、見学した現代美術には印象は残っていません。皆で世界一美しい広場と言われるブリュッセル市のグラン・プラス、ギルドの広場に行き花市場を見てゴディバの店でチョコレートを物色した後に、街の海産物や果物の店などを冷やかしながら街並みを歩き、生かきやムール貝の料理のレストランでベルギービールでの食事を楽しみました。皆で歓談しながらの食事を済ませて勘定書きの支払いをして歩き出したら、ボーイが声をかけてきてチップを求められました。旅慣れた積もりでもワインの酔いに失念してしまいました。

一泊の旅にベルギーの海沿いの北方のヴェネツィアと呼ばれ、古都として繁栄した美しい街ブルージュに医薬史蹟の旅に出ました。ブルージュは美しい水路に囲まれた静かな都市で毛織物とレースなどの名産品があります。ここを訪ねてペギン修道院の庭園の静かなたたずまいの木立の庭を歩いたのは印象的でこれだけでも絵になります。また聖ヨハネ病院の一隅のメモリンク美術館で見た神秘的な宗教画、グルーニング美術館でファンアイクの細密画を見た時には印象的な強い刺激を受けました。同行した奥井登美子さんが「薬史学会通信、No.22」に記述しているように、この街の塔やレンガの街並み、修道院の庭園などは安野光雅の描く世界で、ブルージュという古都での食事と共に強く印象に残っています。

この医薬史の旅の最後はオランダでした。ライデン市やデン・ハーグ市での医薬史関係では、オランダ薬剤師会や薬史学会の方々の配慮もあって多くの収穫がありました。この旅の最終はアムステルダムに向かいました。田園の中に妙な姿勢でスケッチをするレンブラント像を見て、市内の入り口に世界一美しい広場あるゴッホ美術館を見学しました。ここでは荷物、カメラなど入り口で預けさせられました。ゴッホ美術館はゴッホの多数の絵画が若い頃から年代順に展示されていて、青年期の素直な色彩の絵からゴッホが年とともに住んだ所で色彩を変えながら絵画を描き、その色彩がオランダで過ごした時期の暗い色彩から、一変して南仏の明るい色彩に変化していくのを知り興味がありました。最上階にはゴッホが日本の浮世絵に魅かれ模写した絵画が展示されていたのは印象的でした。市内でレンブラント工房の家を見ましたが、多くの工房の人々を使いエッチングに使った機械が展示されていて、レンブラント工房が17世紀に肖像画などの制作に盛んに活動し、写真の無い時代は人物画や室内に飾る絵画を画家に描かせるために工房が繁盛したのでしょうか。 (次号に続く)



レンブラント像

〔書評〕

『くすりの裏側 これを飲んで大丈夫』

富山医科薬科大学名誉教授 堀越 勇

2006年9月25日 第1刷 206頁 集英社文庫 定価 500円(税込)

会員各位もご経験があると思うが、知人が使用中の薬剤などの適否について相談を受けた場合、医師の処方医薬品、あるいはメディアを通じて知った健康食品などといろいろな場合があるが、責任ある確な歯切れのよい返事が出来ない場合も多いと思う。本年9月、薬業界の名物教授として知られる堀越勇(前薬史学会評議員)先生がこの私どもの悩みを解決する新書を刊行したので、ここに紹介する。

本書の「はじめに」の項に著者の発刊の意図が判かりやすく述べられているので、その概要を次に引用する。

「はじめに」

世の中にはいろいろな“評論家”という職業があります。医の世界にも医事評論家というのがありますが、不思議なことに薬事評論家という職業は、これを標榜する人も見たことがありません。どうして薬事評論家だけが存在しないのでしょうか。(中略)

売られているすべての医薬品や健康食品が万能というわけではなく、安全でもありません。作用が強ければそれだけ反対に副作用のことも考慮に入れなければなりません。

そこで、少しでも皆さんの手助けができればと思います、日常生活のなかで遭遇する医学・薬学的な事柄について、信頼できる学会誌に報告された内容を分析し、分かりやすい言葉で解説・論評を加えました。とはいえ、本書は専門家を対象とした学術書を標榜するものではありません。あくまで薬についての放談です。(中略)

身の回りには、常識の嘘や極めて非常識な事柄がたくさんあります。それにまどわされまいよう、使う環境、条件などを見極めながら医薬品、健康食品などを日常生活に上手に取り入れていただきたいとします。本書がその一助となれば幸いです。

本書は次の五章からなる。

第一章 こんなにおかしいー日本の薬事情、第二章 すべての薬がいい薬とは限らない、第三章 間違った使い方が命取り、第四章 それでもまだ取りますか、第五章 漢方薬はすべて安全と思いい込んでいませんか？

興味ある第二章第1項の「ゴールデンピル賞を受賞した薬」(P.78)について、以下に紹介する。

薬に関する非営利組織「医薬ビジランスセンター(NPOJIP)」が2002年10月に開催したセミナーで、医療にとって本当に必要で、安くて良い薬に対して「ゴールデンピル賞」として次の10品目が発表された。このほかに「ジキルハイド賞」と「デビルピル賞」も公表されている。「ジキルハイド賞」7品目は、薬としてはすぐれていても、良い面と悪い面があるので適正に対処せよという警告の意味を込めたものである。「デビルピル賞」37品目は、存在しないほうがよい、製造中止にすべきとの烙印が押された薬である。次の10品目にゴールデンピル賞が受賞された。

(1)抗潰瘍剤スクラルファート、(2)抗痙攣剤バルプロ酸、(3)抗血小板剤アスピリン、(4)抗生物質ゲンタマイシン、(5)抗生物質アモキシリン、(6)呼吸器(喘息)用剤プロピオン酸ベクロメタゾン、(7)消毒剤、滅菌剤ポピドンヨード、(8)心不全剤に用いる利尿剤フロセミド、(9)非ピリン系鎮痛・解熱剤アセトアミノフェイン、(10)オピオイド徐放剤モルヒネ(硫酸)

私どもに馴染みのある薬剤も多数、出てくる。これらの薬剤に対する評価は、医療、製薬、行政、患

者など関係者によって夫々、異なると思われるが、自分が服用する立場で考える良い機会を与えてくれるであろう。会員各位の一読をお薦めする。

(山田 光男)

〔書評〕

『薬の生い立ち —モルヒネからインターフェロンまで—』

中島祥吉 著 薬事日報新書23 (2006、3刊) 2001頁、定価 1,300円

本書の副題では「モルヒネからインターフェロンまで」となっているが、第一章から第十二章までの配列はアスピリン、インスリン、ペニシリン、ストレプトマイシン、塩酸クロルプロマジン、シメチジン、プラバスタチン、コルチゾン、モルヒネ、クロルジアゼポキシド、インターフェロンの順にこれらの医薬品の生い立ち、即ち発見の経緯、薬理作用、対象疾患の病因を解き明かして、如何に新医薬品の臨床応用が治療効果を上げて患者の役に立ってきたかを記している。

更に読者への便宜を計って、各医薬品の作用、適応症、製剤、用法、副作用、他の薬剤との相互作用が纏められて枠で囲んで見やすく記されている。

現在、市販されている一万七千品目を超える医療用医薬品の中から表紙の帯に記されているように新しいブレイクスルーを達成し医療に大きなインパクトを与えた薬剤として選ばれた12の薬剤の名前を見ていると、薬学を志して大学に入学して間もなく迎えた敗戦の日からの60年のことが次々と頭に浮かんでくる。ペニシリン、ストレプトマイシンは第二次大戦中の連合国側で精力的に研究が進められたもので、現物は進駐軍によってもたらされて、人命を救った。一方で疲弊した産業界は抗生物質、特にペニシリンの研究、生産に活路を求めて殺到して混乱状態となったことは忘れられない。ペニシリン、ストレプトマイシンはその後の、抗菌薬、抗結核薬の開発を促進するという波及効果を示した意義は大きい。

コルチゾンも第二次大戦中の連合国側の戦時研究の一つとして強力に進められた研究成果である。ステロイドホルモンを合成する技術の進歩と1948年にコルチゾンがリウマチ患者に劇的な効果を奏した報告は全世界に伝わり、やがて副腎から分泌されるホルモンとは異なる抗炎症作用の強いステロイドが医薬品として合成されるようになった。

1945年以降、わが国は戦争のない平和な時代が60年以上続き、敗戦直後には想像出来なかった物質的に豊かな社会、高齢化社会となり生活習慣病がクローズアップされるようになった。近年の糖尿病患者数の増大に対してはインスリンその他のより良い抗糖尿病薬の開発が期待されている。著者が選んだ12種の薬剤は広い意味で戦後60年の日本の復興を支えた薬剤から現在の歯止めの掛からないストレス社会が必要とする医薬品までを網羅している。これらの中で開発に日本の企業が大きく貢献した高脂血症治療薬プラバスタチンが含まれていることは喜ばしい。

20世紀の初頭から日本人に馴染みのあった解熱鎮痛剤のアスピリンの作用機序が生化学的に解明されたのは1971年と記されている。それ以前に大量服用患者の手術後の大出血の報告がヒントになって始められた臨床薬理学的および疫学的研究により抗血小板薬としての有用性が開けてきたこともアスピリンが有用な薬としての寿命を延ばすのに貢献している。

12種の薬剤の中で歴史的に古いものはモルヒネである。1805年に阿片の有効成分をゼルチュルネル Serturmerが結晶として採り、モルヒネと命名した。

一般的に外国の地名、人名を日本の文字(明治時代には漢字の使用が多かったが、現在ではカタカナが多い)で表現するのは難しい。Serturmerは古くからゼルチュルメルと記されてきたが、実際にドイツに調査に行かれた田端 守京大名誉教授の報告は「モルヒネの発見者ザーチュルナーの史蹟」と題して薬史学雑誌33 9-17(1998)に発表されている。日本薬史学会としては、その意を汲んで今後はザーチュルナーを使用していきたいことを付言する。

モルヒネの鎮痛効果に関して脳内の受容体と内因性麻薬様物質エンドルフィンなどの興味ある知見に触れているが、今日、末期がんの治療に役立っている硫酸モルヒネ徐放剤開発についての史的考察に触れられてないのは惜まれる。

(末廣 雅也)

「浮世絵に見る薬と病い」展をみて

小倉 豊

千葉市美術館で、2006年9月、10月の2ヶ月間、表題の展覧会が開催された。この展示は、千葉大学附属図書館^{いのほな}亥鼻分館の医学部が収集した膨大な医事、薬事資料の一部を公開したもので、最近、整理されたものの中から、病い、治療、薬、信仰などのいくつかのテーマに分けられ、幕末期前後の56点の資料が展示されていた。その一つ一つに訳文とわかりやすい解説がつけられ、一般の人にも理解しやすいものとなっていた。いずれの資料も浮世絵やかかわら版として、色もきれいで、虫食いも少なく美しい作品だった。

病いは、いつの時代においても恐怖の対象であり、江戸時代には、特に、疱瘡、麻痺、虎列刺などの伝染病が猛威をふるっていた。これらの病気に対して当時、庶民の間に流行した浮世絵やかかわら版が、日常の養生法や病気の予防法、治療法、家伝薬の宣伝などに活用され、今日、それらの多くが残っているのは、日本の医事、薬事資料の特長のひとつだと思う。今回、展示された資料から、呪いや神仏への信仰を含め、当時の人々の疾病観や世界観を垣間見ることができた。

日仏薬学会講演会 参加記

五位野 政彦

新しい背広を買う。その袖の中に「仏蘭西」を感じたのは萩原朔太郎である。しかし、彼がフランスに行かなかった理由は「ふらんすはあまりにも遠かった」からである。朔太郎には時間や経済的な余裕があったと思われる。

このいずれも持たない自分にとって、11月17日(金)に恵比寿の日仏会館で行われた講演会「フランスの薬局について」は、まさに天恵のものであった。

日仏薬学会が開催したこの講演会。「薬局における投薬—フランスの場合」のタイトルで演者にはフランス薬剤師会会長のジャン・パロー(Jean Barrot)氏をお迎えした。日本にいてこのような講演

が聴くことができるとは何という幸せであろう。

日常の病院業務が終わってからでないといけない日であったため、開演時刻の18時には間に合わない。遅れて入ったとき、パワーポイントの画面は「(開局)薬剤師の役割」というものであった。パロー先生のご講演を、竹中祐典先生が日本語に通訳されている。その後も、薬剤師の役割、企業の役割、あるいは行政やメディアに対する薬剤師の対応等も含めてフランスにおける薬剤師の業務、目的、使命等のお話があった。またフランスにおける医薬品のカテゴリー、医薬品販売、処方せん調剤(自費、償還等)のシステムについても紹介があった。

会の後半1時間は質疑応答。質問だけでなく、感想、意見等も歓迎、ということなので自分も発言。本年1月に行われた厚生労働省委託のフランス薬学事情について(『日本病院薬剤師会雑誌11月号』)に関してである。約40名を数えた参加者からは医薬品の適正使用(スタチン類を中心に)、EU加盟国相互の薬剤師ライセンス、ジェネリック薬など、現実的で真剣な話題が交わされた。ただし英語、仏語での会話がが多く、討論に着いて行けない部分があったことは筆者の不勉強であり、大変悔やまれた。座長の永井恒司先生、竹中祐典先生などが一部を日本語に訳して補ってくださったことで、なんとか自分は助けられた。

自分は奥田潤、睦子先生の翻訳による文庫クセジュ『薬学の歴史』(HISTOIRE DE LA PHARMACIE : Faber, Dillemann)でフランスの薬学史に接することができたのだが、今回の講演は、まさにフランス現代薬学史というべきものであった。その内容を聞いていて、上気し興奮している自分に気がついた。

これらは現在の日本における薬剤師の役割にも大変参考になるものである。また、この有意義な講演に参加させていただいたことを誇りに思う。

日仏薬学会の竹中祐典会長と同会事務局の高木要先生に厚く感謝を申し上げる。

北海道支部だより

平成18年度北海道医史学研究会・日本薬史学会北海道支部合同学術集会は平成19年1月27日(土)14時より北海道医師会館で開催される。

一般講演(14:00~15:00)

1. 「戦時中発疹チフスに倒れた根室の医師たち」：古屋 統(札幌市)
2. 「ベルツ博士の来道と関場不二彦先生の外遊」：宮下舜一(札幌市)
3. 「関場不二彦著「西医学東漸史話」の仮製本について」：
○秦 温信(社保総合病院、札幌市)、島田保久(元町整形外科、札幌市)
4. 「ホシ伊藤の創設者 伊藤経作の生涯(I) 星一との邂逅」：
本間克明((株)北海道医薬総合研究所、札幌市)
5. 「ドイツ帝国函館領事L・ハーバーと星一」：山 朝江(山医院、函館市)
6. 「北海道薬科大学創設胎動期の新事実」：○吉澤逸雄(小樽市)、中川 収(札幌市)

特別講演(15:10~16:20)

「北海道の医療 明治初期の医制、開業免許の推移」：島田保久(日本医史学会評議員、札幌市)

(吉澤 逸雄)

本会監事、杉山茂先生の著書「薬の社会史」全5巻完結、ご著書の恵贈の案内

本会の監事、(株)カイノス会長の杉山茂先生の著書「薬の社会史」全5巻(近代文芸社刊)の出版が完了しました。これを期として杉山先生よりこれらのご著書を本会会員に恵贈したいとの申し出がありました。これらの著書をご希望の方は、姓名、住所と希望する著書名を記して本会事務局に申し込みください。希望を取りまとめて申し込まれた方に杉山氏のご著書を恵贈します。これらの杉山氏の著書について以下に簡潔に紹介します。

①杉山茂「薬の社会史、第1巻、外郎・透頂香」1999年刊、196頁。

本書は薬学研究者である杉山氏の学位論文ともなった日本最古の売薬として外郎が伝えた透頂香について記述されている。外郎は中国の元の時代1368年来日帰化して、中国の医術と薬剤を日本にもたらした。そして薬剤として透頂香を伝えた。外郎については室町から江戸時代に続く概観が記述されている。透頂香の薬剤の主成分の阿仙薬について、薬学的成分とその作用について広範な解説が記述されている。

②杉山茂「薬の社会史、第2巻、火薬と媚薬」2002年刊、140頁。

日本では昔から黒色火薬の硝石を草や糞尿などのバクテリアの働きにより製造していた。戦国時代の硝石を原料とする火薬の歴史が紹介されている。江戸期になって西欧から火薬の着色の化学物質が輸入されて「和火」として、江戸期の各地の夜空を花火で飾った。また烏頭、附子などの毒性を除去する修治法で媚薬を調製して賞用されたという。これらの富国強兵・強性への探求から火薬と媚薬などについて興味深く記述されている。

③杉山茂「薬の社会史、第3巻、服石・鉱物薬」2003年刊、106頁。

中国では古代から不老不死の願望から種々の鉱物が用いられてきた。金、銀、銅などを錬丹術で医薬としてきたが、西欧では錬金術でさらに多数の鉱物を用いてきた。このことはヨーロッパの医薬博物館でも見聞することができる。この書では最近、東南アジアの塩田から鉱物を採取して薬物としていることも述べられている。これらの鉱物資源からの製薬化学について著者の造詣による多くの記述がある。

④杉山茂「薬の社会史、第4巻、博多・京都外郎」2003年刊、146頁。

15世紀頃から日本も大航海時代になり、遣唐使の平底船から南蛮船に頼った構造船を造り安全な航海が可能となり、中国や東南アジアとの交易により、これらの国々から薬品類が輸入されてきた。九州の博多はそれらの品々の中継点として栄え、多くの医師が外交僧としても来日して日本に医術と医薬を伝えた。医薬の面では多数の医家の活躍で漢方医術が栄えて活躍する時代を築き、日本漢方医術の隆盛期を築いた時期となった。

⑤杉山茂「薬の社会史、第5巻、薬屋色々」2004年刊、172頁。

江戸期には種々なユニークな薬屋があった。合薬屋の虎屋外郎で扱われた薬品、両国薬研堀の四つ目屋はポルノドラッグを扱い繁盛していた。江戸期には遊郭や岡場所などが栄え梅毒が蔓延していた。そ

の治療薬は水銀剤が使われる程度であった。上野黒門町には黒焼屋があり話題となっていた。この本には多くのユニークな薬屋の記述がある。

上記のご著書以外に次の新書2冊も含めます。

⑥杉山茂「薬史から見たふるさと伊豆」近代文芸新書、2004年刊。

⑦杉山茂「薬史こぼれ話」薬事日報新書、2004年刊。

ご希望の方は住所、氏名と希望図書を書いて、本会の事務局までお申し込み下さい。

日本薬史学会事務局：〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16 (財)学会誌刊行センター内

国際薬史学会へ入会しました

このたび長い間、日本薬史学会は国際化時代に対応して国際薬史学会との交流を活発にするために、正式に2007年から国際薬史学会(International Society for the History of Pharmacy / ISHP)会員になりました。従前、国際薬史学会の開催された時は本会会員が個人の資格で参加し、研究発表を続けてきました。このことより今回の入会申し込みも問題なく受理されて、アジアでは初めての会員となりました。

先般、同学会の機関誌(ISHP / News Letter)が送付されて来ましたので、会員各位にお送り申し上げます。12～13頁に本会入会に関する記事が掲載されています。

同誌に本年9月19日からスペインで開催される第38回国際薬史学会が案内されております。参加される場合は当会事務局にご相談下さい。

